

【皇道仏教】

真俗二諦とはあの世の真理（真諦）と、この世の真理（俗諦）が影響し合う姿こそが、正しい仏教のあり方であるという考え方。

たとえば浄土教における真諦とは、いわゆる覚りをひらいた阿弥陀如来の教えのこと。つまり、絶対的不変の真理（出世間的な絶対真理）のこと。阿弥陀仏を疑いなく信じることで、来世での救済につながる。

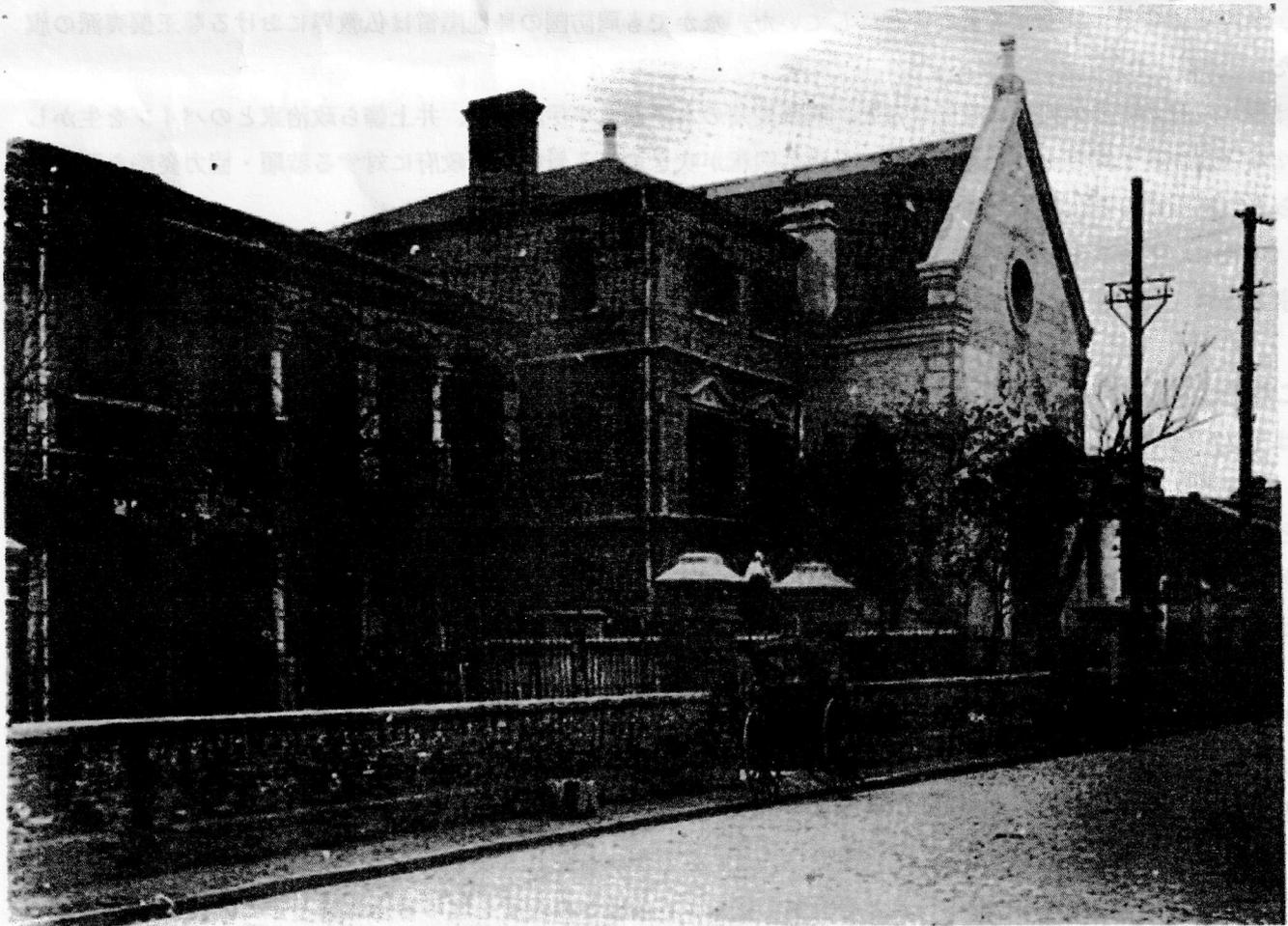
一方で、俗諦とは現世における世俗的な真理（世間的な真理）をいう。この世は迷い、煩悩に満ちている。なので真理のあり方は、状況や時勢によって変わりうる。しかしながら、仏教思想そのものは、現実社会という基盤があってこそ成り立つもの。だから、世俗的な真理は、それはそれで深く探求しなければならない。有難いことに、この世には絶対的な存在、天皇がいる。その天皇を敬い、従うことで我々は現世で救われる――。

【東本願寺が上海に別院】

日清戦争勃発前、仏教界において大陸進出の先陣を切ったのは浄土真宗教団。その嚆矢は、豊後出身で、真宗大谷派僧侶の小栗栖香頂（おぐるすこうちょう）。香頂は東本願寺の北海道開拓を進言し、現地で大谷光瑩に随行した行動派の僧侶だった。その海外開教の手腕を買われて、いち早く清に渡っていた。

香頂が最初に清に渡ったのが1873（明治6）年。1年間、北京に滞在した。渡航に際し、長崎の黄檗宗聖福寺に入って中国人僧侶から中国語を修得している。香頂の目的は、日本と中国、インドの3国で仏教同盟を結んでキリスト教を排することにあつた。

政府要人との関係性は西本願寺に軍配が上がるものの、大陸布教については東本願寺が先鞭をつけた。香頂は最初の渡清で開教の準備を整え、病気になったこともあって一旦帰国。1876（明治9）年に、再び中国・上海に渡った。同年8月、東本願寺上海別院が落慶、入仏式が執り行われた。



東本願寺上海別院（明治四十一年三月竣工）